

[成果情報名] 三重県における飼料用（知事特認）品種「あきだわら」の多収栽培法

[要約] 「あきだわら」の移植日と出穂期、成熟期の関係は、「みえのゆめ」とほぼ同じである。多収を実現するには、5月中下旬移植とし追肥を増肥する。

[キーワード] あきだわら、飼料用品種、多収栽培、窒素吸収量

[担当] 三重県農業研究所 農産研究課

[分類] 普及

[背景・ねらい]

飼料用多収品種として知事特認を受けている「あきだわら」は、県内における作付実績が乏しく、多収を実現するための知見が乏しい。

そこで、「あきだわら」の多収栽培法について施肥技術を中心に開発した。

[成果の内容・特徴]

1. 「あきだわら」の移植日と出穂期、成熟期の関係は、「みえのゆめ」と概ね同等である（表1）。
2. 「あきだわら」を「みえのゆめ」の窒素施肥基準である基肥（設定 5kg/10a、出穂前追肥 2 回（3+3kg/10a）を標準区として、追肥増量区、つなぎ肥区（出穂前 30 日）、つなぎ肥かつ追肥増量区で比較すると、追肥増量区が倒伏が少なく安定して多収となった。つなぎ肥を施用すると倒伏の危険が高まる。
また、6月下旬の移植では、増肥効果が見られず、5月中下旬移植に比べて収量は低くなり、倒伏の程度が大きくなる（図1）。
3. 成熟期の窒素吸収量が多いほど粗玄米収量が増加し、その増加の程度は5月移植に比べて6月移植で鈍くなる。6月移植では窒素吸収量が 13kg/10a 程度で倒伏程度が大きくなり、その時の収量は約 640kg/10a となる（図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 多肥栽培により発病が助長されるいもち病や紋枯病に対しては、あらかじめ予防的防除を行う。「あきだわら」は、いもち病に対して弱いので十分に注意する。
2. 本試験は、松阪市の農業研究所内の水稲連作、堆肥無投入の圃場で行われ、試験期間の地力窒素の供給は約 7 kg/10a であった。堆肥投入圃場や麦大豆栽培後の圃場では適宜施肥量を調節する。
3. 省力のための緩効性肥料は、「みえのゆめ」用のものが利用可能である。

[具体的データ]

表1 移植日と出穂期、成熟期の関係

年	播種	移植日	品種	出穂期	成熟期
2015年	5月8日	5月25日	あきだわら	8月11日	9月23日
			みえのゆめ	8月10日	9月23日
	6月5日	6月22日	あきだわら	8月25日	10月12日
			みえのゆめ	8月25日	10月9日
2016年	4月22日	5月11日	あきだわら	8月3日	9月7日
			みえのゆめ	8月3日	9月7日
	6月3日	6月20日	あきだわら	8月21日	10月4日
			みえのゆめ	8月22日	10月4日

注1) 出穂期、成熟期は標準施肥(基[設定5]-0-3-3)の値

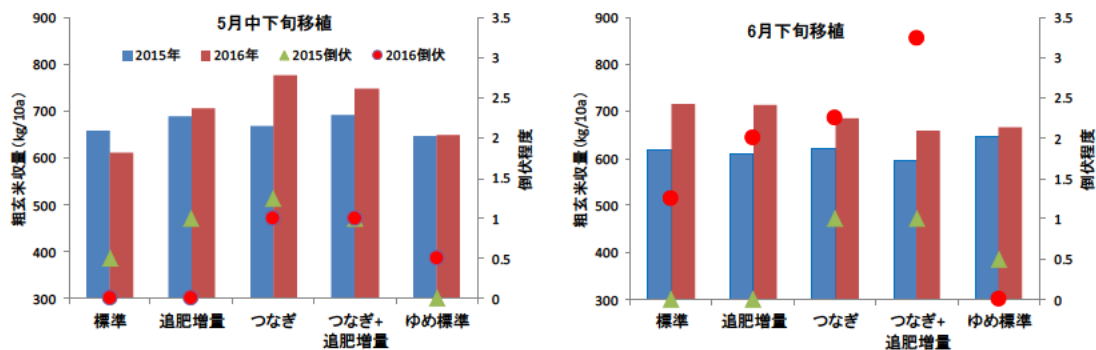


図1 移植時期及び施肥方法の違いが「あきだわら」の粗玄米収量および倒伏に与える影響

注) 標準(基+0+3+3) (基肥+つなぎ肥+穂肥+穂肥: Nkg/10a、基肥の実測値は5月中下旬移植で2015:4.5 2016:5.2、6月下旬移植で2015:4.1 2016:4.6)、追肥増量(基+0+5+5)、つなぎ(基+4+3+3)、つなぎ+追肥増量(基+4+5+5) 施肥日(つなぎ、穂肥1、穂肥2)は、2015年の5月中下旬移植で(7/9、7/21、8/4)、6月下旬移植で(7/22、8/10、8/18)、2016年の5月中下旬移植で(6/30、7/14、7/25)、6月下旬移植で(7/25、8/5、8/15)であった。

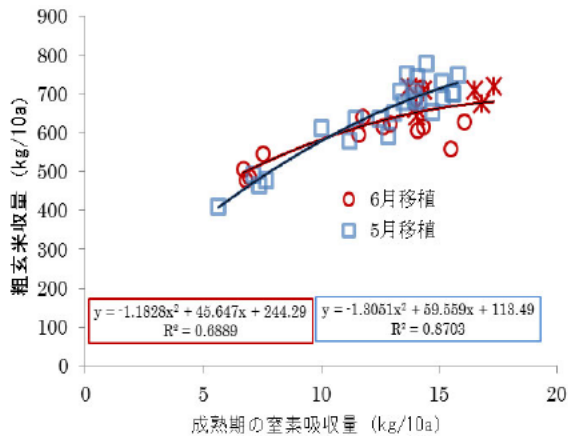


図2 「あきだわら」の移植時期別の成熟期施肥窒素吸収量と粗玄米収量の関係

(田畑茂樹)

[その他]

研究課題名：飼料用米の高品質安定生産技術および効率的流通保管技術の確立

予算区分：執行委任(畜産課)

研究期間：2015～2016年度

研究担当者：田畑茂樹 内山裕介

発表論文等：なし